

## 赤道直下で洋一誕生の電報

結婚して二年目の春、暫

くぶりに釜石に入港した時  
なかが会いに来た。釜石海  
員会館で妊娠を知らされた。

なかは結婚してから、体  
の不調で子供ができなかつ  
た。農作業の合間に仙台の  
大学病院に通っていた。毎  
週一度位矢附から通うのは  
大変だった様だ。生家から  
松川橋まで徒歩約三十分、  
仙南バスに乗り大河原駅で  
国鉄列車に乗り換え、蒸気  
機関車の普通列車で約一時  
間で仙台駅に着き、路面電  
車に乗り、大学病院に着く。

昔「結婚して子無きは去  
る」と言われていた時代が  
あった。親戚で子供が出な  
いので、別れた人がいる。

なかも子供が出来ないので、白石の刈田病院で診察を受け、  
紹介状を貰い、大学病院で治療する事になったそうだ。

船員保険と国民健康保険を使うから、治療費は大した事は  
無いが、先生の勧める高価な薬を使用した様だ。病院で薬を  
飲んで帰って来るので、バスを降り生家迄の三十分はフラフ  
ラで辿り着き、寝床にダウン、正体無く眠ると言っていた。

宮鉄砲町の伯母さんの家に行ったとき、近くの八卦さんに、  
むりむり連れて行かれ、見てもらったら、「子供が出来てい  
る」と言われた、その次の診察の時先生から妊娠していると、  
告げられ、先生も「どうだい」と自慢しながら、祝福して戴



浄土ヶ浜が見える高台にて

いた。

生家に二人して帰り休暇を過ごしたとき、生まれる子供の名前を、私の希望で太平洋の洋、大洋漁業の洋を一字入れ、男の子だったら洋一、女の子だったら洋子と命名するように話した。出漁する五・六日、前平沢の母を連れ、釜石に帰り三人で釜石海員会館に泊まり、釜石魚市場等を見物させ、出漁準備を終え、宮古に回航した。船員の殆どは宮古出身である。三人で旅館に泊まり、三日程浄土ヶ浜等を見物させ、五色のテープと手を振る家族に見送られ、赤道直下の鮪漁に出港した。母にはいつとときの親孝行だった。

私達の船は、第七あさひ丸、百トン無い小型漁船。母船は一万一千トンの天洋丸。漁船は約一五隻、黄肌マグロが主体で毎日が豊漁だった。指定された日時に母船に横付け、水揚げする。私は籠に乗り、母船甲板まで七・八メートルを吊り上げて貰い事務的なことを終え、母船の風呂に入り、水揚げが終わる頃、船に戻る。

赤道直下でも海上は三十度前後だ、大して暑さを感じない。母船も満船近くになった八月二十四日、銚子無線局より一括呼び出しの中に第七あさひ丸が入っている。送信機を大型に切り替え、応答、公衆電報の受信だ。

モールス信号で、宛ダイセアサヒマル、ムラカミシンイチ、本文「オトコタンジョウハハコゲンキ チチ」父文一郎が円田郵便局から打った電報だ。世界の何処に居ても船舶無線電報は届く。料金も内地と同じだ。

我が子の出生の無線電報を受信する人は、あまり居ないだろう。その後帰途に就き、三崎に寄港、釜石に無事帰港した。

宮古に休養の為回航、私は洋一に会うため、矢附に帰り、生後四十日余りの我が子を、抱く事が出来た。

私の人生で一番嬉しく楽しかった時、忘れ得ぬ思い出多い、若い時代だった。